

令和五年度学力検査問題

国語 ② (教育学部・医学部看護学科)前期日程

(問題紙 一〇十八ページ 別紙解答用紙枚数 一枚)

解答時間 一〇〇分

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 二、本冊子のページ数は右に示したとおりである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがある場合は申し出ること。
- 三、解答はすべて別紙解答用紙のそれぞれの解答欄に記入すること。
- 四、解答用紙の指定された欄(二箇所)に、忘れずに本学の受験番号を記入すること。
- 五、試験場内で配布された問題冊子は試験終了後持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。（\*は本文の後に注があることを示す。）

著作権の関係上公表しない

著作権の関係上公表しない

著作権の関係上公表しない

著作権の關係上公表しない

著作権の関係上公表しない

(佐藤健二『ケータイ化する日本語——モバイル時代の“感じる”“伝える”“考える”より』)

[注]

\*マグネット・フォン⇨磁石式電話機。話し手が電話機についている磁石式発電機のハンドルを回して電話局に信号を送り、電話局が電気を相手方に送ることで受け手の電話機のベルが鳴る仕組みであった。

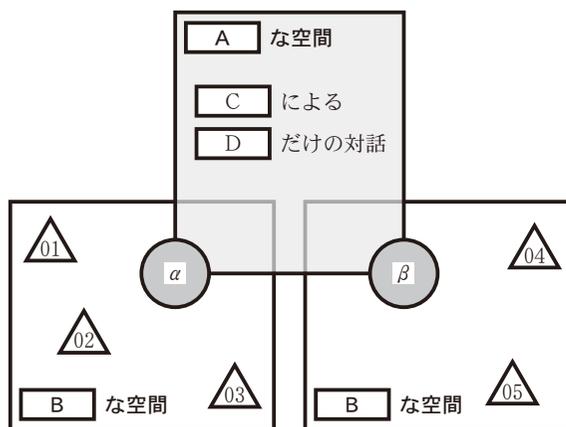
\*すでに論じたように⇨この文章に先立つ論述において、ローカルな空間での声の役割と機能等が述べられている。

問一  
 い。  X ・  Y に当てはまる最も適当な語句を、次の選択肢の中からそれぞれ一つ選んで、記号で答えなさい。

<input type="checkbox"/> Y	<input type="checkbox"/> X
ア 経験	ア 安定性
イ ことば	イ 根元性
ウ 場	ウ 新規性
エ メカニズム	エ 二次性
オ リアリテイ	オ 人間性

問二 次に示すのは、この文章を図で表したものである。  
 A  $\rightarrow$   D に当てはまる語句を本文中から抜き出しな

さい。



\* $\alpha \cdot \beta$  及び 01~05 は、それぞれの空間にいる人間を表す。

問三 傍線部「同じく一九世紀の発明品である光学的科学的複製技術としての写真」とあるが、本文中の表現を用いて、「電話」と「写真」の共通点を四〇字以内で述べなさい。

問四 電話を使用することで空間における人間のあり方はどのように変化したか、六〇字以内で述べなさい。

問五 次に示すのは、この文章における「電話で話すことの特徴」が今日のコミュニケーションの状況にも当てはまることを説明したものである。電話以外のコミュニケーションツールを例に挙げて、五〇字以内で空欄を埋めなさい。

この文章における「電話で話すことの特徴」は今日のコミュニケーションの状況にも当てはまる。  
例えば

二

次の文章は、石牟礼道子『苦海浄土』第一部第三章「ゆき女きき書」の一節である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

著作権の関係上公表しない

著作権の関係上公表しない

著作権の関係上公表しない

著作権の関係上公表しない

(石牟礼道子『苦海浄土』より。出題に際し原文の一部を省略した。)

問一 

a
---

ゝ
---

e
---

 のカタカナを漢字に改めて、楷書で丁寧<sup>かいしよ</sup>に書きなさい。

問二 

i
---

ゝ
---

v
---

 に入れるのに最も適当な語を次の選択肢から一つずつ選んで、記号で答えなさい。なお、各選択肢は一回だけ選ぶこと。

ア ふわーつと      イ ぴくぴくと      ウ ぴったりと      エ らんらんと      オ ゆらゆらと

問三 傍線部①「いま<sup>、</sup>わの気力<sup>、</sup>のようなもの」と同じ内容を表している表現を、本文から一五字以上二〇字以内で、そのまま抜き出しなさい。

問四 傍線部②「彼が生涯押し立てていた帆柱<sup>、</sup>のようなもの」とは、釜鶴松のどのような生き方の比喩か、三〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部③「自分が人間であることの嫌悪感に、耐えがたかった」とあるが、ここで「わたくし」は、なぜ「人間であること」に嫌悪を感じているのか、七〇字以内で説明しなさい。

三

次の文章は、『発心集』の一話である。これを読んで、後の設問に答えなさい。（\*は本文の後に注があることを示す。また、本文を一部省略したところがある。）

著作権の関係上公表しない

（『発心集』より）

〔注〕 \* 八幡別当 || 石清水八幡宮の長官。

\* 遠流 || 遠い親戚

\* さのみこそ || 援助してほしいとばかり

\* 便りあらん事 || 私にできる事

\* 所知 || 領地

\* 事よろしく侍らん || まあまあ上等なのを

\* 心にくからず || 心にかかつて

\* 帷 || 裏地のない、夏用の着物。

問一 二重傍線部 a s e の「に」について、文法的な説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア 形容動詞の連用形活用語尾

イ 完了の助動詞「ぬ」の連用形

ウ 断定の助動詞「なり」の連用形

エ 格助詞

オ 接続助詞

カ 副詞の一部

問二 傍線部①「などかは何事ものたまはせぬ」、②「年来えまうけ侍らず」を現代語訳しなさい。

問三 本文から考えられる八幡別当頼清の人物像として適当なものを、次の選択肢の中からすべて選んで、記号で答えなさい。

ア 横柄

イ 活発

ウ 儉約

エ 小心

オ 親切

カ 偏屈

問四 波線部「心すけりける」に、「すきものにこそ」という表現に注意して、本文からうかがえる永秀の人物像を、四〇字以内で説明しなさい。

四

次の文章は、「遠謀」について述べたものである。本文を読んで、後の設問に答えなさい。（\*は本文の後に注があることを示す。また、設問の都合で、本文の一部を省略したところ、送り仮名を省いたところがある。）

著作権の関係上公表しない

『統資治通鑑長編』より

〔注〕 \*易Ⅱ儒教の經典の一つである『易経』のこと。

\*市井Ⅱまち、人の多いところ。

\*稗販Ⅱちよつとした商いをする

\*資Ⅱたくわえる

\*裘褐Ⅱ冬の着物。

\*絺綌Ⅱ夏の着物。

\*偷安Ⅱ一時の安楽を求める

\*苟生Ⅱ無駄に生きながらえる

\*酔飽Ⅱ酒に酔い、たらふく食べる

\*編戸Ⅱ戸籍に編入された人。庶民のことをいう。

問一 二重傍線部 a r c の読みを、送り仮名も含めて答えなさい。(現代仮名遣いでよい。)

問二 傍線部について、次の問いに答えなさい。

(1) 漢字・仮名まじりで書き下しなさい。(送り仮名は現代仮名遣いでよい。)

(2) 現代語に訳しなさい。なお、「致治」と「保邦」は、「読書」と同じ構造を持つ動詞である。

問三 筆者の言う「遠謀」とは、どのようにすることか。本文に書かれた具体例を一つ示しつつ、四〇字以内で説明しなさい。